

満蒙開拓青少年義勇隊の教育

— 清水増男の証言から —

東京都北区立桜田中学校 末 澤 薫

はじめに

私は過去数回にわたり、「香川県綾歌郡端岡村青年団の活動」について学会発表を試みた。そのうち、昭和62年10月3日に筑波大学で行なわれた、第22回「日本教育行政学会」において、「香川県綾歌郡端岡村青年団の活動 — その訓練的側面について —」を発表した。この発表の中で「端岡村青年団と大日本青年団の関係」で、⁽¹⁾端岡村青年団の活動が国家の意図によって、大きく動かされていることを明らかにした。そして、「端岡村青年団の記録」のうち、次の内容に興味をひかれた。

- 昭和14年6月5日に、満蒙開拓青少年義勇軍として、農事講習所に入所した青年の所在が明らかでない⁽²⁾。
- 昭和14年6月22日には、興亜青年勤労報国隊員として、一人の青年が壮途に上るが、この青年は後に帰村している⁽³⁾。
- 昭和15年7月6日には、義勇隊現地報告会が開かれている⁽⁴⁾。
- 昭和15年10月9日には、満州開拓青年義勇隊激励袋が送られている⁽⁵⁾。

これらの事実から、満蒙開拓青少年義勇隊員として出征した隊員は帰村しないのではないか、このことから、満蒙開拓青少年義勇隊は、一体何をやっていたのか、それを生んだ教育的背景は何か、と疑問は深まっていった。

清水増男⁽⁶⁾の証言が得られたことで、多くの疑問が解決したが、改めて「満蒙開拓青少年義勇隊の教育」の研究の必要を強く感じた。

1. 郷土教育

何不自由なく広々とした静かな農村で育った14才の少年にとって、満蒙開拓青少年義勇隊へ出征する姿は、大きな感動を与えたのである。友人の中には、学芸会の席上で満蒙開拓青少年義勇隊に出征することを披露されて、出征の意志を固めた者もいた。しかし、清水増男は父が中学校にやるとやるという声にも、母の出征に反対する声にも耳を貸さず、大地のうねりのような戦争への流れを幼い一心に背負い燃え尽くそうと明確に満蒙開拓青少年義勇隊への出征を純粹に願ったのである。このことを清水増男は次のように語っている。「高等科一年の時、第一次義勇軍が村から5人くら

い出ていった。これを見て、『よし俺も義勇隊にこう』と決心していた。出ていった満州の結果がどういふ状況であるかという話はきかなかつた。ただ日本でいるより、他国に行って活躍したいという気持ちは多分にその頃はあつた。だから満州というところごく憧れた訳です。』⁽⁷⁾と証言している。

そして、教師もこの強い少年の意志を認め反対せず、暗黙の了解をしている。戦争参加を喰ひ止める力は無力であつた。

時代とはいえ、県の開拓課が少年達を選抜した。大人達には応募をすすめさせ、少年達には、集団生活の愉しさを経験させ、五族協和というような大東亜にかけける夢を、義勇隊々員と寝食を共にして教育したのである。このことを清水増男は次のごとく証言を続ける。

「講習は朝6時起床、10分位で点呼、朝の体操とランニング、駆け足は兵舎の周りをまわる位だから、1kmかそこらではなかつたかと思う。それから朝食、あとは満州の教育です。例えば五族協和とはどういふことか、また普通の学科や義勇軍の綱領だとかです。綱領は暗誦して誰でも唱えられるようにしました。それから、「大和ばたらき」という整理体操をやりました。「ヒイー、フー、ミー、ヨー、イー、ムー、ナー、ヤー、」といくとそれをくり返して体を動かします。午前中は、ほとんど満州の学科が2時間ぐらひはあつた。その内容は、これから大和民族が一番に立って、アジアの平和をつくる。そのためには、我々が先頭に立って、朝鮮民族や、漢民族を指導していかにかいにかんという教育であつた。とくに言われた内容は五族協和ということを非常に言われ、大和民族は他の民族の範となれといわれた。こういう教育を毎日繰り返して1週間が過ぎた。訓練期間中、お互いに友人を良く知り合うように言われた。夜なんかはお互いに自分の出身村を言つて知り合うように言われた。』⁽⁸⁾と証言している。

肉体的、精神的負担は県講習にはない。あるのはむしろ、愉しさであつた。少年達が理解した満州の教育は、実に当時の日本の教育を満州の地に実現する理想の教育としてとらえられていたのである。早い時期の合宿訓練で少年達の雄飛をうながしたのである。

2. 内原訓練所の教育

昭和14年3月22日に内原に着いて、訓練を2年受けている。渡満の準備のために肉体と精神を鍛えることに狙いがあつた。満蒙青少年義勇隊は軍隊組織ではあるが、15才の少年達には教育活動を重視せざるをえない。ここに満蒙開拓青少年義勇隊の特色がある。さらに戦時下の軍学校がことごとく、軍のエリートになるものであつたのに対して、満蒙開拓青少年義勇隊は、農家の次男、三男に土地を与えて開拓訓練を行なつて心身を鍛えたのである。満蒙開拓青少年義勇軍手牒の綱領には「我等義勇軍ハ天祖ノ宏謨ヲ奉ジ心ヲ一ニシテ迫進シ身ヲ満州建国の聖業ニ捧ケ神明ニ誓フテ 天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス」⁽⁹⁾とあり、もはや後戻りすることの許されぬ立派な軍隊である。しかし、その訓練の方法には青年学校の教育と軌を同じくするものがあつた。大正9年には既に青年教練への令旨が皇太子殿下から、内務、文部両大臣をとおして全国青年団に下賜されてい

る。

「国運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツコト多シ諸子能ク内外ノ情勢ヲ顧ミ恒ニ其ノ本分ヲ盡シ奮勵協力以テ所期ノ目的ヲ達成スルニ勗メムコトヲ望ム」⁽¹⁰⁾とあり、訓練の項目が青年教練として手帳に示されているが、開拓などの生産的訓練は認められていない。内原の自然を生かした開拓を中心とする訓練は勤労奉仕の特異で先駆的なものではなからうか。

満蒙開拓青少年義勇隊の教育が軍隊的か、青年学校的であったかは見極め難い。しかし、内原では、青年学校の教育までも及ばぬところもあった。とくに剣道では、山の雑木を切り倒して木刀をつくり、これで居合と型ばかりで胆力を鍛えている。これは剣道具や指導者の不足に理由があったのではなからうか、これに対して、例えば端岡村青年団では、剣道、銃剣道の試合を繰り返して技倆を磨いているのである⁽¹¹⁾。

「大和ばたらき」という体操に匹敵する動作は、県講習と内原訓練所だけに見える。しかし、義勇軍手牒にみえる「日本体操次第書き」⁽¹²⁾とは別のもののようである。

軍歌についても、内原では「開拓の歌」あるいは、「大陸色にやきつけた」を謳っているが義勇軍手牒にはない。さらに大陸で謳う歌は異なるものであり、内原訓練所の独自の指導がみえる。

農業については、当時の端岡村青年団では、農家を巡回して作物の収穫の手伝いなどを行っている⁽¹³⁾。しかし、内原では、原野を採採して開墾鋤で掘り陸稲を播いている。内原訓練所では自前の用地を持ち、広大で大陸に似た規模内容であるが、良き指導者に恵まれて、効果をあげることができた。それが加藤完治であった。当時の青年訓練の特徴として、人間的に秀れた指導者がいることであり、内原も例外ではない。座学としての満州の話は、少年達の夢を大陸にかけるのに大きな成果をあげた。しかし、軍事訓練は不寝番がある程度で、むしろ青年団の方が充実していた。内原訓練所の教育について、清水増男は次のように語っている。

「親元を離れたが、2ヶ月の教育が終われば満州へいけるという希望が大きく、つらいとは思わなかった。

朝5時30分起床、点呼、大和ばたらき、駈け足、朝食、そして、午前中は学科です。内容は満州の国情、我々が向こうの民族を指導して、先頭に立って、平和を築かねばならんという教育です。作業は開墾です。腕くらいの松林を伐採し、根を起こし、開墾鋤で開墾し陸稲を播く。開墾は毎日、飯盒に弁当をもって行き、帰りは「開拓の歌」を謳って帰る。

開墾のない時は学科か、居合、打ち込みの練習があった。木刀になりそうな木を採採し、皮をむいて木刀を作る。これを「イヤー」と打ちこんで、そのままの姿勢を保つ。やりだしたら、2、3時間やる。飽きさせ、耐えさせ、精神修養をした。1週間に半日はあった。

軍歌練習は毎日1時間あり、軍事訓練には、不寝番がありました。⁽¹⁴⁾」と証言している。

3. 嫩江訓練所の教育

昭和14年6月20日に嫩江訓練所に入所するが、実際にはさらに8km奥地で設備のない所で訓練を

受けている。場合によっては、匪賊との応戦をやらねばならず、銃と鍬とが必要になってきた。教育は中学校程度の教科書が渡され、修身・数学・満州語が授業として行なわれた。修身は五族協和、大和民族の自覚が教育され、軍事許練は現役軍人が行ない、とくに冬季の雪中匍匐前進には悲鳴をあげている。軍歌練習は「植民の歌」が多く、義勇軍手牒にもあり、本格的に練習している。

満州語は現地人講師によって教えられ、挨拶ができた。現地人からは、農業や生活全般について教育されている。

農耕は充実していて、ジャガイモが内地より良く採れ、土地が肥沃であった。

生活面では隊員同志の喧嘩があり、刃物で刺し殺すという暗い場面があった。嫩江訓練所では、多くの障害はあったものの、土地と気候とに恵まれ、現地人との交流も平和で協力的で、満蒙開拓青少年義勇隊の教育は成功であったといえる。この点について、清水増男は次のように述べている。「6月20日に、満州国、コッカショ、ノンジャンケン、ノンジャン、ヤエスハッシュ駅に着いた。さらに7km奥地のノンコウ訓練所で3年間の訓練を受けることになった。設備はないが井戸が深く30m位あった。

ここの3年間は農耕主体の訓練であった。あとは10%の教練と10%の学科があった。冬の軍事訓練は現役の伍長によって雪中匍匐前進が行なわれた。農耕は、トマト、ナス、キャベツ、燕麦、小麦、大麦、ジャガイモを栽培した。土地が肥えていて、ジャガイモが大きくなって土地が割れて転げ出てきた。

夏の昼間は気温が30度にもなるが、夜は寒い。学科は中学校程度の教科書が渡され、修身、数学、満州語があり、それぞれの教師がいたが、満州語は現地人が教えた。現地人とは物の売買をしたり、仕事を教えてもらった。

訓練の中に各個訓練というのがあった。5～6人規模で、匍匐前進とか手榴弾投げや、銃や機関銃の扱いもあった。

大きな事件として隊員同志の喧嘩があった。精力の吐け口のない殺伐さの中で、お互に自分の勢力を鼓舞して喧嘩になった。ドス一本を外被の下に隠して仲間を刺殺した事件があった。⁽¹⁵⁾と証言している。

4. 大蒙義勇隊開拓団の教育

昭和17年の春から、昭和19年5月15日に召集令状が来る迄の間は、ツンドラコン、ジャライトツキの蒙地に入植し、放牧生活を送っている。支那語の代りに蒙古語を憶えている。農耕型の生活から、トウモロコシを草で炊き食べるという放牧型の生活がはじまる。

夏は禪一つで裸馬に乗り、水を浴びて、夜はそのまま寝るという豪快な生活をしている。

自分達の宿舎は自分達の手で建てるという苦労を重ね、生活の基盤を築いている。

農耕は無理だと、現地人から一人当たり25町歩の牧草地を徴収し、それに見合う、牛、馬、羊を放牧している。若い隊員に、現地人から、饅頭や飽子などが届けられるほど親密である。そして、

現地の人々も、日の丸の威光には礼儀を尽くしている。開拓団によっては、さらに奥地に入り、現地人に代って開拓をすすめた隊もあった。

日本人の入植という政治的目的の下ではあるが、満蒙開拓青少年義勇隊の掲げた、五族協和や、開拓の精神は、青少年達の手で現実のものとなった。この点について、清水増男は次のように語っている。

「宿舎は自分達で全部作った。最初は蒙古人の家を徴収したが、半年の間に自分達の家をつくり入植した。仕事は開拓だが、蒙古人の畑を日の丸の旗の威光で徴収して作った。多くは荒地を開き粟を播いたり、大豆を植えたりして畑にしていた。蒙古での農耕は土地が瘠せていて駄目でした。そこで現地民がやっている牛と馬と羊をかりて放牧をやった。大体一人当たり25町歩割り当てがありました。毎日、朝牛舎から牛を追い出し、あとは狼に喰われないように見てまわっていた。そんなに広い所でも草がない。下の方の湿地帯になると背丈くらいの葦が生えているが、羊を飼うのがやっとくらいしか生えてない。畑では、粟、コーリャン、トウモロコシを育てた。肥料をある程度やらなければ育たなかった。19年5月に蒙古に召集令状がきた。必要ならば青年学校卒業の証明を出すと言われた。⁽¹⁶⁾」と証言している。

5. 98部隊の教育

昭和19年5月15日に召集令状がきて、ハイラル95部隊輜重隊に配属となり、さらに295部隊、工兵隊に入った。この隊は興安嶺にある陣地の構築に従事している。蒙古での牛馬の取り扱いを生かして、輜重隊に入隊させられたのであろうが、ここで開拓員から、戦闘員になっていく。輜重隊は軍隊の中では軽んじられたが、開拓の仕事からでは、毎日、風呂と飯があって一番良かった時期であった。

15人の兵隊で15分間に50 tonのセメントを臨時停止した貨車から降ろす仕事は、セメント袋が破れ、首が固まり廻らないという苦しい仕事であった。しかし、歩兵の前では輜重隊員を乗車させるという隊長の粋な計らいに応じて深夜の食料運搬はすすんで引き受け、隊長や古参兵に酒やビールを持ち帰り可愛がられる少年兵の姿がある。

古参の兵達の中には、中隊長の命令でも動かず、馬の蹄鉄打ちでは中隊長が直々機嫌をとる場面を見て凄いと感動している。

ハイラル91部隊では、軍隊組織の裏表を実際に体験して、軍隊生活の教育を受けている。このことについて、清水増男は次のように語っている。

「輜重隊が兵隊ならば、蝶々、トンボも鳥の内といわれた輜重隊である。295部隊付陣地構築工兵部隊に配属となり、明けても暮れてもセメント輸送を行なった。

歩兵がトコトコ歩いていると、輜重隊は馬一頭分、余分にもっている。分隊長は「乗車用意ノ乗車ノ」と命令して荷物の上に輜重隊員を乗せた。この時は花形だった。馬の手綱をもっている馬は足が早いから引ばってもらえる。

夜中に命令がくる。「各分隊2名宛」と召集がかかると白樺の林から馬を連れてきて鞍をつける。呼ばれないでも出て行って一番前に並ぶ。「番号ノ」と号令がかかる。人数が揃い次第出発し、遅い者は帰される。

駅につくとバサバサ荷物を降している。酒はある。ビールはある。羊羹はある。干麺はある。欲しい物は何でもある。自分の好きなものを積み込む、米は2俵くらい、あとはビールと酒と分隊長や少隊長が好きなものを積んでいく。「出発ノ」の号令が出される時は既に酔っている。

8月13日には洪安嶺に7kgの爆弾を抱いて敵の戦車に飛びこむ肉攻隊に志願したが、敵の戦車は現れず終戦を迎えた。⁽¹⁷⁾と証言している。

6. シベリア抑留時の教育

小学生の時から培った満州に行きますという教育の成果が、世界の中で破れ去った日が終戦である。忠君愛国、不撓不屈、進取の気性の教育が敵の戦車の前に破れ去った。

五族協和の願いを信じ、満州の開拓を目ざしながら、戦闘隊員となり、捕虜となっていた。すべての物を略奪され、ボアートで1ヶ月収容される。昭和20年9月20日に乗ったシベリア行の赤い列車では、指揮系統は混乱する。その最たるものは、部隊長が自らが吐いた嘘、「シベリアを廻りウラジオストークから、日本内地に護送される。」とは約2年後の昭和22年5月15日に日本に上陸することによって明らかになる。9月20日にボアートを出発して10月3日にチャイナゴロスタイルに着く迄の車中は、ナホトカに向かっていると信じる兵士達を騙し続けた2週間であった。皇軍の兵士が恥もなく泣き、少年の話を書くという、軍隊の秩序も規律も失った。

満蒙開拓青少年義勇隊の若さと体力がいかに発揮されはじめる。人よりも戦利品を優先して運び、人よりも労働を上位におくロシア兵のやり方が少年達をかえていった。

チャイナゴロスタイルで12月4日までいて、10月中頃から、2ヶ月近く続いた回気熱の40度近い発熱をおして、2時間の列車行、そして8kmの雪原を銃で追われながら、収容所に辿りつき、奇跡的に回気熱が治ったというのは、義勇隊の若さと鍛練の成果である。この移動中に何人かの仲間が死に、春までに400人のうち167人の墓が建った。

収容所では、日中はマイナス20度、夜間はマイナス50度の寒さの中で、昼間は用水路づくりの激務が続いた。そして食事は、燕麦の陸湯、黒パン200g、岩塩汁という厳しいものである。宿舎は半地下式の板屋根に土盛りしただけの粗末なものであった。若く体力のある者だけが生きのびた。

強制労働は15人の兵士の前後に2人ずつのロシア兵がつき、隊列を200m以上離れれば100発100中の銃で狙撃された。正に強制された日々が続き、兵士の死体を埋葬する穴掘りも栄養失調で掘れず、だんだん浅くなっていった。死体からも、ロシア兵の命令で毛布を剥ぐという欠乏した毎日であった。

決死の覚悟で脱走を計画していると、「日本内地に帰してくれる。」というデマが飛び中止となる。欠乏と強制労働、それに疑心がシベリアの教育である。赤化行動隊さえ、僻地のために訪れな

かったほどである。それでも、日本に帰りたい一心で肩章をはずし、帽子の星を切り取り、赤布を巻いて共産党に同調していった。

共産党の教育を本格的に受けるのは、ナホトカにおいてである。滅菌消毒され、ストーブ付の列車でナホトカに着いた。ナホトカの1ヶ月は赤化教育である。朝から昼めし抜きで、夕方5時迄講義を聞かされた。赤旗の歌、インターナショナルを憶えた。ソ連が内地に帰国されるにあたって行った赤化教育であったが、割合に形を整えれば、それで良いという教育であった。

14や15歳で雄躍して渡満し、開拓精神を叩きこまれ、先頭に立って行ない、戦争に負け捕虜となり、強制労働をさせられ、帰国にあたっては共産主義の教育を強制された。そして、日本の看護婦を天使と思い帰国したが、日本に帰り共産党活動をやっている者はいない。このようなシベリア抑留時の教育について、清水増男は次のように話している。

「武装解除せよという命令がきた。日本は勝ったんだと信じた。これで日本内地に帰れるぞということになった。「日本は勝った。又勝った」と歌うだけだった。それから、2時間もしたら、ドンドンドン砂煙が近づいてくる。道路が地鳴りしている。洪安嶺の山からおりてくる物凄い数の戦車である。戦車から兵隊が降りて握手するが、そのうち、「馬よこせドバイ、ドバイ」と銃を向ける。こちらは何も抵抗する物がない。次に長靴をよこせ、脱げと言う。裸一貫になり、ポアートの収容所では、自分達で作った鉄条網の中で1ヶ月を過ごした。

9月20日に赤い貨車がきた。赤い貨車は20車両あった。いよいよこれから、ウラジオストークをとって日本に護送されると考えた。貨車に乗って、マンチュリーまで一昼夜、それからチタまで一昼夜、チタから分岐してシベリア鉄道を東に向う、そしてウラジオストークに向かうと考えて二昼夜待った。

三昼夜目に朝起きて、今日は汽車は東に向いているか、朝日が昇るのを待つのだが、やはり陽は後から出る。1週間という間、陽を見続けた。21日に乗ったら25日頃にはシベリア鉄道に入って東に向わねばならぬのに、27日も28日も西に向いている。汽車は西に向いているから、捕虜となって鉱山で使われてポンコツになると考えた。そこで、「もう帰れないよ兵長」と言うと先輩の兵士達が「本当に帰れないのか」と泣きだした。

10月3日にチャイナゴロスタイルに着き、さらに、12月4日に発熱をおして2時間行った。熱は回気熱であった。熱は40度ぐらいあった。貨車から降りて、家の一軒もない雪原を歩かされ、ビリになってしまった。ロシア兵に「ダワイノダワイノ」と銃でおいたてられ8kmの道を歩いて、防寒具の重さと熱でフラフラだった。400人の内、この移動で何人かが死んだ。次の朝には2人死んでいた。春の雪解けまでに167の墓ができた。

マンドリン（自動小銃）をかっぱらって脱出しようという気持ちもあった。クロパン、マッチ、塩を少しずつ毎日分担して貯めるという計画もあった。マンドリンで狼を追払い、外蒙から内蒙に遊牧の民にまぎれて脱走しようというものだった。死ぬとか生きるとかを考えていては、こういう計画は実行できない。脱走を計画していると「日本内地に帰してくれます」というデマが飛ぶ、これ

に尾鰭がついて針小棒大となり、それなら脱走をしなくても日本内地に帰れるということになる。

日本内地に帰してもらえると噂がたって、2、3日の内に、頭、脇、下の毛、全部を剃られてしまった。それから風呂に入り着ている物は滅菌消毒された。兵舎前に整列すると赤い貨車が来た。今度は本当らしいと考えたが2回も移動させられたから嘘ではないかと疑問に思った。4月だというのにストーブがあり石炭が積みこまれた。4月3日に乗り、4月17日にナホトカに着いた。

ナホトカでは5月13日までの約1ヶ月間、これが赤化教育だった。青年行動隊が入ってきて、朝から夕方5時迄、飯も喰わず講義を聞かされた。この講義に反対したら、日本に帰れないということとは前以って言われていた。その内容は日本国内についたら、共産党の軸となって働けというものだった。赤旗の歌を謳って、私はもう共産党でありますという態度を見せればよかった。そういう意味では幅があった。

5月13日に遠州丸に乗り込んだとき、日本からきた看護婦が「兵隊さん、ご苦労様でした。」と言ってくれるのを見て天使だと思った。終戦より2年近くおくれたの帰国であった。遠州丸には2000人が乗船していた。」と証言している。⁽¹⁸⁾

7. 満蒙開拓青少年義勇隊の教育

満蒙開拓青少年義勇隊の教育は、国家の理想を教育の理想とした点に特異性がある。軍国主義国家の理想は戦争に勝利することであるから、軍事教育であった。しかし満蒙開拓青少年義勇隊の教育はそれだけにとどまらず、荒地を開拓してアジアの平和に奉仕するという意味があった。多くの軍学校が狙った将校教育とは異なり、人間性をも狙った。軍学校に限らず、当時の教育がエリート養成し、これを国家理想の実現の牽引力としたが、満蒙開拓青少年義勇隊の教育は、農家の次男、三男に土地を与えて開拓をすすめた。

県講習では軍学校のように形式にこだわらず、現地帰りの義勇隊員によって伝達講習を行ない、満州開拓の理想に燃えさせたのである。

本格的な満蒙開拓青少年義勇隊の教育は、茨城県内原で行なわれたが、ここでは原野の開拓が中心で強い理想に支えられた教育が行なわれている。このことについて三瀧は、「その主人公たる加藤完治先生は、以前は熱心なクリスチャンであり、後に寛克彦博士の教を受けて、わが国の道統たる古神道に日本人として受持を自覚せられ、その実行実習として、この大事業を起こされた。すなわち、かねて問題になっていた大陸進出、植民地競争の態度を改め、無欲純真なる青少年を以て、未墾の満蒙を開拓し、他人の力を借りず一意新アジアの開拓に捨身貢献しようというのが本意であって、ここに日本民族の伝統的「やまとごころ」が活々と結晶していったと思う。⁽¹⁹⁾」と指摘している。

満蒙開拓青少年義勇隊にとって、内原は教育と奉仕によって理想を求めていった。しかし、大陸に渡っては戦闘員として戦わねばならなかった。このような傾向は乙竹岩造においても見ることができる。

「満州事変、支那事変、及び第二次欧州戦争に相尋いで、時局は我が国民を世界史的新使命に直面せしめるに及び、それを転機として、内には国体明徴、教学刷新の運動が古今無比の勢を以て押し出すこととなった。この新体制が教育の理想・内容・方法に一大転換を齎しつつあることは、吾等が眼前に直視する通りである。⁽²⁰⁾」として戦争への教育を美化している。

経済及び政治の動向からも、満蒙開拓青少年義勇隊の教育は教育の理想を追うことで済まされなかった。この点について西村榮一は、

「然るに大東亜戦争は、直接には過去三百有余年にわたる西欧の東亜支配と、最近百年に近き米国の勢力を撃滅し、東亜の民族と領土と資源とを彼等の羈絆より解放し、永久の平和的生活圏を建設しようというものであって、この戦いによって始めて人類の理想の社会がその建設の第一歩を跡づけるものであり、人類真の歴史生活が創造されるものである。⁽²¹⁾」とのべ、経済及び政治原理からも聖戦の域を脱することはできず、したがって、満蒙開拓青少年義勇隊もまた教育の実践にとどまらず、聖戦の一翼を担うことになっていくのである。

清水増男の証言によって、郷土教育では純粋な少年を見つけ出すことに重きがおかれた。そして五族協和を中心とする東亜新秩序への夢が育てられている。

内原訓練所では実際の開墾作業をとおして開拓魂が育てられている。といっても、実際にこれだけの開墾作業が続けられるのは、農家出身者でなければ無理である。

嫩江訓練所では少年達に銃と実弾が渡され、戦闘員としての教育と開拓者としての教育を受けている。

大蒙義勇隊では農地にかえて放牧が仕事となり、漢語にかえて蒙古語を学び、蒙古人から生活を学んでいる。

98部隊からは完全な軍人として、開拓団から、軍隊の仕事に尽くし遂に捕虜となる。

シベリア抑留中は嘘、迫害、強制労働に耐えることを学び、赤化教育を受け帰国する。

満蒙開拓の理想が捕虜の身となり、軍国主義教育から共産主義教育を受けることになり、手に鋤をもち、銃を持ち、シャベルを持ち、繋がれの身となる。国家の犠牲とはいえ、変転極まりない教育が満蒙開拓青少年義勇隊の教育である。ここで望まれるのは国家の平和と一貫性ある教育、教育者の分別と教育の限界を見極める眼をもつことである。

まとめ

戦時下の教育は日本の敗戦と同時に断罪されたとして触れたがらぬ傾向があるが、清水増男の証言は現代の教育に多くの示唆を与える。13才という未熟な少年に思想教育をして、鋤と銃をもたすにいたった苛酷さは、教育者と国家に反省を求め続けねばならない。満蒙開拓の希望に燃えた青少年を志と異なり戦闘員となし、結果的には捕虜となし、その苛酷な取り扱いや思想の教育は人道に外れる。この事実から現代の教育では次の示唆を得た。

① これからの国際教育では、その国の生き方に協力させ排他的な民族教育をしない。

- ② 開拓，労作などの勤労体験や奉仕活動は継続して重視し，知識偏重の教育にしない。
- ③ 校外学習，修学旅行，海外旅行などでは，安全，厚生を重視し常に現地実態を知る。
- ④ 成熟度に合わせた教育計画を立て課程を作り，未熟な生徒に重荷を負わせない。
- ⑤ 教育の展望，一貫性，限界を常に把握する。

注

- (1) 末澤薫「香川県綾歌郡端岡村青年団の活動」 — その訓練的側面について — 第22回日本教育行政学会発表資料，2頁，昭和62年
- (2)～(5) 末澤茂行蔵「記録」端岡村青年団
- (6) 清水増男，第三次大蒙義勇隊に参加，（昭和16年～22年）現在埼玉県在住，昭63・6取材
- (7)～(8) 前掲
- (9) 「滿蒙開拓青少年義勇軍手牒」綱領
- (10) 武川陸軍少将編述「青年教練」大正15年，成武堂
- (11) 前掲，「記録」端岡村青年団
- (12) 前掲，「滿蒙開拓青少年義勇軍手牒」
- (13) 前掲，「記録」端岡村青年団
- (14)～(18) 前掲，「清水増男」
- (19) 全国拓友協議会「拓友」7号11頁，昭和50年4月発行
- (20) 乙竹岩造「日本国民教育史」412頁，目黒書店，昭和16年1月20日
- (21) 西村榮一「大東亜建設経済原理」3頁，湯川弘文社，昭和18年3月20日